

上ノ国町 史跡上之国館跡のうち洲崎館跡 (C-02-25)

調査理由	遺構内容確認
調査地	檜山郡上ノ国町字北村地内
調査主体	上ノ国町教育委員会
調査期間	令和3年5月17日～11月2日
調査面積	300 m ²

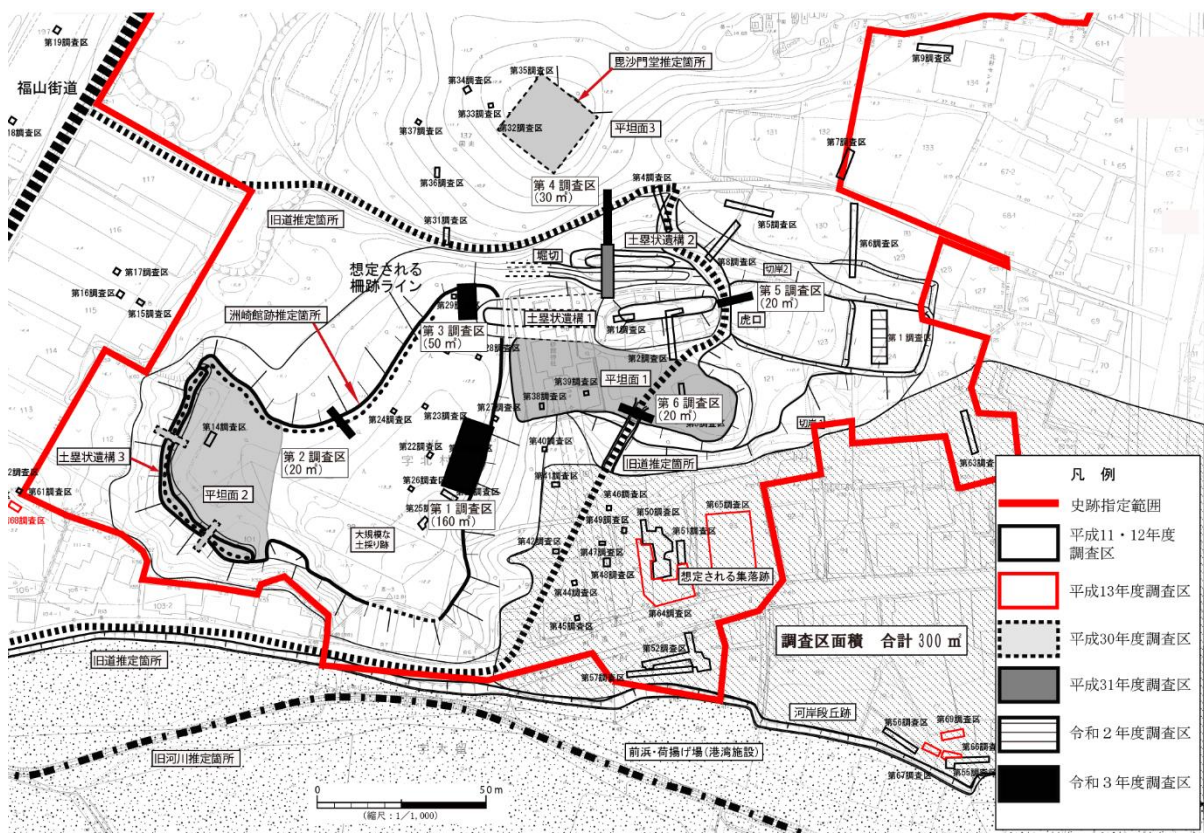
(1) 洲崎館跡の概要

洲崎館跡は、天の川河口から北に約 1 km の日本海に面した標高 5 ～ 10 m 前後の砂丘平坦面上に位置し、長禄元年（1457）のアイヌとの戦いで功績を挙げ、季繁の娘婿となった武田信広が天ノ川河口右岸に築いた中世城館である。

寛正3年（1462）に毘沙門金像を納めた毘沙門堂を建立されるが、安永7年（1778）の火災で本殿・拝殿ともに焼失し、松前藩によって翌年再建されている。

昭和8年にはジフテリア、腸チフスなどの蔓延により、砂館神社参道西側の平坦面に隔離病舎（木造トタン葺平屋46坪）を建設している。昭和36年（1961）に砂館神社の南西側の町道沿いから、開元通寶や永樂通寶を含む銅銭約2,500枚が採集され、青磁・白磁なども出土している。

また、同 54 年（1979）に神社東方 120m ほどの砂丘上の畑地から珠洲すり鉢（Ⅴ期）を被った人頭骨が発見され、同 58 年（1983）には神社南西側の砂丘の砂取りによって地形が改変され、その際に大量の陶磁器と擦文土器が採集されている。



R3年度 洲崎館跡調査区位置図

平成 11～13 年度に行われた洲崎館跡の内外で分布調査では、掘立柱及び竪穴建物跡などの遺構の他、青磁・白磁・染付・古瀬戸・珠洲・越前・信楽焼の陶磁器や金属製品、アイヌが使用した骨角器などがみついているが、土塁や空堀といった館跡に特徴的な遺構が検出されておらず、縄張りについてはまだ十分な把握ができていない。出土する中世陶磁器の年代は、13 世紀後半～16 世紀初頭を示し、文献史料で示される築城年代より古い遺物が散見されている。

（２）主な調査成果

第 1 調査区—平坦面において、昭和 8 年頃の隔離病棟建設に伴う削平（右側平坦部）が確認された。中世の砂丘層から骨角器などが出土している。



近世以降遺物出土状況



中世面検出状況

第2調査区—未調査。

第3調査区—平坦面において、昭和8年頃の隔離病棟建設に伴う削平によって造成された平坦面が確認された。近世の掘立柱建物跡（柱間3.5尺）が確認された。中世の堆積層では、砂丘層が確認された。

遺物は、1640年降下の駒ヶ岳d火山灰（Ko-d）下から懸仏（毘沙門天）、中世陶磁器（青磁・珠洲）などが出土している。Ko-d火山灰上位からは近世陶磁器、瓦、寛永通寶などが出土している。



近世柱穴検出状況



懸仏出土状況

第4調査区-Ko-d 火山灰がレンズ状に堆積（右側箇所）して確認され、空堀の可能性が考えられる。



中世面検出状況



空堀状遺構検出状況

第5調査区—Ko-d 火山灰下から旧道跡と思われる窪みが確認されている。



旧道出土状況

第6調査区—Ko-d 火山灰下から旧道跡と思われる窪みが確認されている。



旧道出土状況

(2) 懸仏

昨年度に花沢館跡で発見された北海道初懸仏（如意輪観音）に続き、毘沙門天の懸仏が出土している。

・ 毘沙門天像

毘沙門天は四方を守護する四天王のうち、北方を守護する「多聞天」である。単独で祀られる際に「毘沙門天」と呼ばれる。

- ・ 青銅製（高さ 8.2 cm×幅 4.0 cm×厚 1.0 cm）
- ・ 銅板を打ち出して作られる。鏡板に留めていたものが外れ、毘沙門天像だけ出土したと思われる。摩滅が激しいが、須弥山をイメージした岩座に立ち、左手の持物（じもつ）は欠損している。甲冑を表す刻み模様が施される。



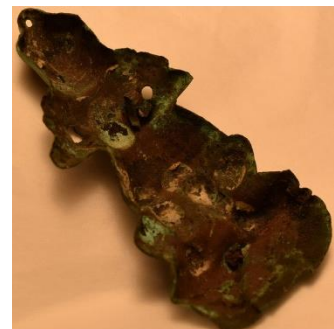
表



裏



裏（斜め）



毘沙門天像 高さ 9.2 cm、南北朝～室町時代、『半蔵門ギャラリーHP』より転載)



毘沙門天像懸仏 14世紀、『服部和彦氏寄贈資料図録Ⅱ』國學院大学考古学資料館より転載)

(3) 瓦について

瓦については、若狭産の燻瓦、能登産の瓦が出土している（建築ヘリテージサロン渡辺一幸氏のご教示による）。毘沙門堂の瓦については、焼失後に本殿及び拝殿を再建した安永8年（1779）の翌年のご神体勧請の際の棟札に「瓦師」の名が記され、火事で焼失後に瓦を噴いたことが推測される。また、拝殿は文久2年（1862）に再建されている。



砂館神社棟札